

巡見使に関する一考察

はじめに

細井 計

巡見使とは、原則として、江戸幕府が將軍の代替わりごとに幕領、私領の区別なく、諸国の実情を視察するために派遣した役人のことである。寛永十年（一六三三）、三代將軍徳川家光の時のものが例となり、延宝九年（一六八一）一月二十八日（この年は九月二十九日に天和と改元）、五代將軍徳川綱吉が「諸国巡見衆」を任命して派遣してからは、全国を八つの地域に分けて將軍の代替わりごとに行うことが定着した。その後、七代將軍徳川家継の時（この時は派遣しようとしたが中止された）を除いて、十二代將軍徳川家慶の代替わりに伴う天保九年（一八三八）まで続けられた。

地域ごとの巡見コースは延宝九年（天和元年）以降ほぼ定着しており、幕領、私領の別なく在地の民衆を直接監察し、大名たち個別領主の「仕置の善悪」を監督することに主眼がおかれていた。しかし、巡見使を受け入れる藩側で模範回答などを準備していたので、監察の実効性が失われ、次第に儀式化していった。⁽³⁾

東北地方から松前を視察した奥羽松前巡見使は、正使には御使番から、副使は二名で御小姓組と書院番から選任された。この一行にはそれぞれの家来が随行したので、総勢では一〇〇人前後の大部隊となった。

それではこのような巡見使を迎えるにあたって、盛岡藩ではどのように行動したのであろうか。家老席の執務日記である「雜書」⁽⁴⁾から二、三とりあげて、具体的に検討してみよう。

一 「雑書」について

まず最初に、「雑書」について簡単に触れておくことにしよう。^⑤研究者の間では周知のところであるが、盛岡藩の家老席で日々記録された執務日記のことを、一般に「雑書」と呼んでいる。それは各年の日記原本の表紙に「雑書」とあるからである。一例をあげれば、現存する最古の日記の表紙には、「寛永廿一甲申歳三月より十二月迄 雑書」と記されている。そしてこのように、統一して「雑書」と表記するようになったのは、恐らく、日記に整理の手が加えられたと考えられる文化年間（一八〇四〜一八一八）のことと思われるが、「雑書」の名称それ自体は以前からあった。例えば、「雑書」延宝四年（一六七六）七月十三日条に、「一雑書、留書、今日より桐田弥次兵衛・米田四郎兵衛留候様二と、（家老の）権兵衛（下田征政）・治太夫（奥瀬善定）・七左衛門（榎山隆章）申渡之」（傍点筆者、以下同様）とあったり、また、天和二年（一六八二）二月十二日条にも、「……去年之雑書、二委細有之」と記されているので、日記を付け始めた時から「雑書」と称していたものと考えられる。

現存する「雑書」は、江戸時代初期の寛永二十一年（正保元年、一六四四）から幕末の天保十一年（一八四〇）までのものであるが、このうち、明暦元年（一六五五）、同三年、万治二年（一六五九）、同三年、寛文四年（一六六四）、貞享三年（一六八六）、元禄元年（一六八八）、享保十一年（一七二六）、宝暦四年（一七五四）、文政三年（一八二〇）、同四年、同五年、同六年、天保元年（一八三〇）の一四年間分が欠けているので、一九七年間分で一九〇冊（岩手県指定文化財）からなっている。

これらの日記のうち、特に寛文四年と貞享三年のものが無いのが惜しまれる。寛文四年は盛岡藩の三代藩主南部重直が、九月十二日に継嗣を定めないうで病死したため、藩の存廃が問われた年であったから、それに関わる重大な記述があったものと思われる。また貞享三年は、巖鷲山と呼ばれていた岩手山（二〇三八メートル）が大噴火した年である。もし日記が現存していたならば、重直の遺領相続や噴火の状況などを具体的に知ることができたのではなかろうか。

各年の記録期間は一月一日から十二月三十日までであるが、年によっては、一部に日録が脱落しているところもある。例えば、寛永二十一年（一六四四）は一月一日から三月十三日まで、承応二年（一六五三）は一月一日から同四日まで、万治四年（一六六一）は一月一日から同二十二日まで、寛文元年（一六六一）は十二月二十六日から同三十日まで、寛文十二年は一月一日から同十日まで、元禄二年（一六八九）は一月一日から閏一月四日まで、享保七年（一七二二）は一月一日の最初の部分が脱落している。また、寛延三年（一七五〇）の「雑書」では、十一月二十三日条のところに十二月七日条が誤って綴じ込まれているなどの乱丁もみられる。

記録内容は、領内の出来事を中心となっていることはいうまでもないが、時には將軍家をはじめとする他藩の記事もみられる。各年ともに正月の儀式からはじまり、五節句（人日・上巳・端午・七夕・重陽）を経て歳暮に至っているが、その間の政治、経済、社会、文化などをはじめ、庶民の生活に関わるものまでが網羅されている。具体的な内容としては、諸法令、参勤交代、藩主の鷹狩り、幕府へ献上の鷹・白鳥・鶴・菱喰・鮭・鱒・薯蕷（山芋）・かたくりの粉、城内で開催された演能と大般若供養（大般若経を転読して除災招福を祈る法会）、公儀馬買い、役人の人事異動と休暇願、藩士の家督相続・婚姻・嫡子願、改暦、改名、街道の並木、盛岡八幡宮などの神社仏閣の祭礼、伊勢神宮をはじめとする社寺参詣と抜参り、繫・鳶宿・台・鹿角大湯・湯瀬・下風呂などへの湯治、百姓一揆、凶作・飢饉、罪人の打首獄門と領内外への追放、欠落（逃亡）、火事、風水害、海難事故、酒値段の公布など、領内のあらゆる出来事が記録されている。したがって、盛岡藩政史の研究を進めるうえで、の最も基本的な史料となっている。

この「雑書」を解説して出版してほしいという要請に応じて、現在、その翻刻出版事業が多くの人々の協力によって継続している。この度、『盛岡藩家老席日記雑書』第二十一巻が刊行された（第四巻からは筆者が責任校閲にあたる）。

表1 「雑書」の刊行一覧

書名	巻数	収載年	刊行年
盛岡藩雑書	第1巻	寛永21年(1644)～承応3年(1654)	1986年2月
	2	明暦2年(1656)～寛文10年(1670)	1987年7月
	3	寛文11年(1671)～延宝4年(1676)	1989年5月
	4	延宝5年(1677)～天和2年(1682)	1990年10月
	5	天和3年(1683)～元禄4年(1691)	1991年12月
	6	元禄5年(1692)～元禄10年(1697)	1992年12月
	7	元禄11年(1698)～元禄15年(1702)	1993年12月
	8	元禄16年(1703)～宝永3年(1706)	1994年12月
	9	宝永4年(1707)～宝永7年(1710)	1995年12月
	10	正徳1年(1711)～正徳5年(1715)	1996年12月
	11	享保1年(1716)～享保5年(1720)	1997年12月
	12	享保6年(1721)～享保9年(1724)	1998年12月
	13	享保10年(1725)～享保13年(1728)	1999年12月
	14	享保14年(1729)～享保16年(1731)	2000年12月
	15	享保17年(1732)～享保20年(1735)	2001年12月
盛岡藩家老席日記雑書	16	元文1年(1736)～元文3年(1738)	2004年1月
	17	元文4年(1739)～寛保1年(1741)	2004年10月
	18	寛保2年(1742)～寛保3年(1743)	2005年3月
	19	寛保4年(1744)～延享2年(1745)	2006年3月
	20	延享3年(1746)～寛延1年(1748)	2007年3月
	21	寛延2年(1749)～寛延3年(1750)	2008年3月

注 『盛岡藩雑書』第1巻～第15巻までは盛岡市の熊谷印刷出版部から刊行、『盛岡藩家老席日記雑書』第16巻以降は東京の東洋書院から刊行中。編集は盛岡市教育委員会・盛岡市中央公民館、責任校閲は第4巻から細井計。

ている。本書には、寛延二年（一七四九）から同三年までの二年間分が収載された。『盛岡藩雜書』第一巻（寛永二十一年＝正保元年＝一六四四）から承応三年（一六五四）まで収載）が出版されたのは昭和六十一年（一九八六）のことであつたから、今年の平成二十年（二〇〇八）までに二二年間を要したことになる。これで日記全体の約半分にあたる一〇〇年間分の出版ができたことになるが、あと一〇〇年間分が残されている。既刊分は表1のとおりである。

二 徳川綱吉時代の巡見使

まずはじめに、五代將軍徳川綱吉について簡単に触れておこう。彼は正保三年（一六四六）一月八日、三代將軍徳川家光の四男として江戸城で生まれた。幼名徳松。母は側室光子、お玉の局（北小路＝本庄太郎兵衛宗正の女、桂昌院。承応二年（一六五三）八月、松平右馬頭綱吉と称し、寛文元年（一六六一）閏八月九日、上野国（群馬県）館林二五万石に封じられた。延宝八年（一六八〇）五月、綱吉は兄家綱の遺言で五代將軍に就任し、將軍宣下は同年八月二十三日、宝永六年（一七〇九）一月に病死するまで在職三〇年の長きにわたつた。⁽⁸⁾

この綱吉は延宝八年十二月に、「下馬將軍」といわれた大老酒井雅楽頭忠清（在職寛文六年＝延宝八年）を罷免して幕政の実権を掌握すると、不行跡の大名や旗本を相次いで改易や減封に処した。また、財政や民政を重視して、老中の堀田政俊にそれを専管させ、さらに天和元年（一六八二）十二月に大老に起用する一方、同年六月、勘定吟味役を設置して幕領支配の刷新を図るとともに、年貢未進、勤務不良の代官を大量に処分した。⁽⁹⁾

このような綱吉の「賞罰明白」⁽¹⁰⁾「賞罰嚴命」⁽¹¹⁾策を基軸とする政治は、いわゆる「天和の治」と称された。しかし貞享期（一六八四～一六八八）以降になると、悪法といわれている生類憐みの令を濫発する一方、元禄・宝永期（一六八八～一七一）には、側近の牧野成貞や柳沢吉保を重用し、側用人政治を展開した。そして各地の神社仏閣の造営・修復を行い、さらに財政難を貨幣改鑄によつて打開しようとした結果、品位の低い貨幣の発行によつて、かえつて経済界の混乱を招くなど、悪政を展開したことも有名である。⁽¹²⁾

さて、徳川綱吉は延宝九年（一六八一）諸国へ巡見使を派遣するにあつて、二月三日に次のような巡見使条目を発布した。⁽¹³⁾

国々領主、代官に仰出さるゝは、今度諸国巡見命ぜらるゝといへども、国城の図つくるに非ず。人馬、戸口の点検に及ばず。御朱印券の外の人馬は、定の質とりて滞なく出すべし。いづくを巡察すとも、使者、贈遺一切あるべからず。郷導のものなくて叶はざる所は、申にまかせいだすべし。所在酒掃に及ばず。道橋修造すべからず。しかし往行たよりよからぬはこの限にあらざ。駅々の客舎営作すべからず。茶亭新につくるべからず。諸

駅米豆その地価もてうりあたふべし。其他の物もこれ亦同じかるべし。……旅館あたらしき筵席を用ふるに及ばず。旧くともくるしからず。浴室、厠なき所はかくろく営むべし。諸調度旧しともくるしからず。もしなき所はかくろく設置べし。やどるべき家ゐ、一村に三軒なくば、寺にてもまた他村をへだてゝも苦しからず、其地になき売物、他所より搬送してうらしむべからず。

この時の奥羽松前巡見使は御使番の保田甚兵衛宗郷、それに御小姓組の佐々喜三郎成澄と飯河伝右衛門信順の三人だった。⁽¹⁴⁾ 彼らは会津、山形、秋田、弘前、松前などを巡見したのち、弘前領から盛岡領の馬門へ入り、野辺地、有戸、横浜、中ノ沢（中野沢）、田名部、小田ノ沢（小田野沢）、泊、尾駸、平沼、根井、下市川、八戸、剣吉、三戸、田子、関などを通り、「来満難所」⁽¹⁵⁾といわれた峠を越え大湯、錦木塚、松山、尾去沢、花輪、湯瀬、田山、中佐井（浅沢）、浄法寺、小繋、沼宮内、洪民などを巡見して盛岡に至るルートをとった。⁽¹⁶⁾

このような巡見使の下向に関連して、延宝九年（一六八一）六月、仙台藩の気仙郡奉行河東田長兵衛から盛岡藩の御目付三上太兵衛と松井作太夫に對して、巡見使についての問い合わせがあった。このような先例はなかったことだが、去る四月に「田瀬寛間沢御境目」で河東田と三上・松井が出会い、近づきになっていたのである。問い合わせ事項は弘前領から盛岡領へ入る日限、盛岡領内の巡見日数などであった。これに對して盛岡藩では、

津輕地より松前へ御渡海、又津輕御着岸、夫より御領内へ被為入筈ニ候故、御渡海ハ順風次第第二候へハ、実正不被申越候、領内御廻被成儀ハ日数十八日之筈ニ御座候、併風雨之節ハ御逗留可被成哉之由、

相應の返事を出していた。⁽¹⁷⁾

延宝九年（一六八一）八月二十六日、巡見使一行が洪民宿を出発したので、迎えとして家老の北九兵衛宣繼と榎山七左衛門隆章が長坂まで、町奉行の高屋四郎右衛門と高橋惣左衛門が上田一本松まで出向いた。一行が午前一〇時過ぎに盛岡城下六日町の御飯屋（藩の公的な接待施設）に到着するとすく、四代藩主の南部重信から御使者として保田へ遠山次郎左衛門、飯河へ小菅新助、佐々へ柴田長左衛門が遣わされた。この三人の使者が帰ってから、午後一時に藩主が巡見使三人を訪問した。それ以後、巡見使の三宿へ家老の北と榎山、それに桜庭兵助と下田権右衛門たちが参上して挨拶した。

巡見衆一行は八月二十七日、午前七時ごろ盛岡の御飯屋を出発、中の橋から丸の内、仁王通、厨川古館へ出向き、それから材木町、大沢川原、馬場小路、六日町、石町（文化九年＝一八一二に穀町と改名）、舟橋を通過して仙台へ向かった。その際、北九兵衛ら四人の家老は舟橋詰めまで、二人の町奉行は舟橋向かいまで出かけて見送りをした。

三 徳川家宣時代の巡見使

六代將軍徳川家宣時代の巡見使であるが、その前に、家宣について簡単に触れておく。彼は寛文二年（一六六二）四月二十五日、甲府二五万石の領主徳川綱重の長子として甲府で生まれた。幼名左近、虎松。母は側室おほら、於保良（田中治兵衛時通の女、長昌院）。延宝四年（一六七六）十二月に元服して綱豊と称した。同六年、父綱重の死後に家督を相続し、同八年九月、一〇万石を増増されて三五万石の領主となった。宝永元年（一七〇四）十二月、叔父の五代將軍徳川綱吉の養嗣子となって家宣と改名した。¹⁸同六年綱吉の死後、四八歳で六代將軍に就任したが、正徳二年（一七一二）十月十四日、在職わずか三年余りで没した。¹⁹

さて、家宣時代の「奥羽并松前蝦夷」巡見使は、宝永六年（一七〇九）十月に御使番の細井左次右衛門勝郷、御小姓組の北条新左衛門氏如、書院番の新見七右衛門の三人が任命された。²⁰そして「今度諸国巡見候面々へ、先規巡見之道筋并泊休付等書付、右巡見之面々へ被指出候様、万石以上之衆」へ達せられた。²¹十一月二十六日には、巡見の案内として御物頭田丸郷右衛門、御元締七戸長右衛門、御目付松尾吉左衛門が任命された。

宝永七年（一七一〇）二月十六日になると、野辺地、横浜、中ノ沢、田名部、砂子又、小田ノ沢、泊、尾駁、平沼、根井、市川、三戸、田子、関の一四か所の「御巡見御飯屋御普請大奉行」に御物頭の赤前治右衛門が、雫石、山本、国見峠、郡山、大迫、横田、上宮守、下宮守、土沢、花巻、鬼柳、岩崎の一二か所の普請大奉行には御物頭の下条図書が任命された。また、先の一四か所の「御巡見御通、道橋御普請大奉行」には野村左達が、来満、大湯、松山、花輪、湯瀬、田山、中佐井、浄法寺、小繋、沼宮内、渋民の一か所は坂牛孫助が、雫石以下の一二か所の道橋普請大奉行は上田多太夫が仰せ付けられた。²²こうして巡見使を迎えるために、巡見使条目に反してまでも、御飯屋の普請と道橋の改修工事が行われていたのである。

宝永七年六月二十七日には、出火の際に詰める役人として、「細井左次右衛門様御飯屋へ毛馬内九助、北条新左衛門様御飯屋へ漆戸勘左衛門、新見七右衛門様御飯屋へ大萱生玄蕃」が指名された。七月八日になると、巡見使の通行の節は、侍丁や足軽丁には小身の給人を昼夜付け置き、火の用心と怪しい人を町内に滞在させないようにすることが、御目付へ申し渡された。

巡見衆一行は七月十四日に盛岡領の野辺地に入り、「御領内は十五日振二御廻可被成由」を伝えた（七月十五日条）。同十七日になると、宇都宮の本陣にいた盛岡藩主南部利幹のところに、江戸からの飛脚が巡見使の細井宛ての息子丹宮の状箱を持参したので、家老の桜庭安房が披露したところ、小身の御給人に届けさせるようにとのことなので、北田二郎右衛門を申し付けた。北田は七月六日に盛岡を立ち、八日野辺地、九日青森、十日に平館まで行ったが天気が悪かったので、十二日青森に立ち帰り、暮れごろに状箱を届けている（七月十七日条）。

巡見衆一行は宝永七年七月二十六日午前八時に沼宮内を発足し、午後二時ごろに盛岡に到着することになったので、家老の江刺舎人と野田典膳の兩人が長坂まで迎えにまかり出た。巡見使三人が御飯屋に到着すると即刻、中野吉兵衛、江刺舎人、野田典膳の三家老が御飯屋へ参上している。一行は七月二十七日に盛岡を出発したので、見送りとして中野が新山舟橋まで出かけ、江刺と野田は藩境の鬼柳まで出向いていた。

この時は巡見を急いでいたようで、松山、湯瀬を飛び越し、花輪でお昼、田山で泊まり、段々通過して盛岡で一宿、ここでは栗谷川古館や方八丁も見ず、遠野へも立ち寄らず、大迫より土沢へかかって花巻で泊まり、「鬼柳御昼にて仙台領へ」移動するという慌ただしさであった(七月二十八日条)。「雜書」正徳二年(二七二)八月二十七日条をみると、老中の大久保加賀守忠増から江戸留守居に渡された書き付け(諸国巡見使条目)には詳細な規定が記されていた。²³⁾それは今後の巡見使が順守すべき規定ともなったので、若干長くはなるが、次に掲げることしよう。

一 今度国々御領所村々巡見被指遣候付、右之面々相通候道筋掃除并道橋一切作り申間敷候、馳走として送り迎之者出候義可為無用事、
一 右之面々御朱印員数之外、人馬入候ハ、其所定之駄賃錢有之は其定之通、定無之所ハ近辺之御定之割合を以、駄賃錢取之、人馬可相出候、御朱印之外に賃なしの人馬一人疋疋も不可出之事、

一 巡見通候道筋にても、百姓農業の義少も無遠慮いとなミ候様に可被申付事、

一 私領村々に、若巡見命旅宿候共、少々之小屋懸取繕は不及申、畳替可為無用、古ク候ても不苦、賄道具等も有合を以借可申事、

一 旅宿に可成家、一村に三軒無之所ハ、寺又ハ村を隔候てなりとも不苦事、

一 泊、昼休の場所にて入用之飯米、塩噌、薪并酒、肴、野菜等ハ、其所の相場次第売候様に可被申付事、

一 其所に無之商買物、脇より遣置売せ申間鋪候、衣類、諸道具ハ勿論、酒、肴ニても持寄売候義堅可為停止事、

一 右之面々、金銀米錢、衣類、道具ハ不及申、酒、肴、菓子等迄一切受用不申筈ニ候間、内々にても堅ク音信不仕様ニ知行所之者共へ可被申付候、

若内々ニて音信仕旨相聞おゐてハ可為曲事候間、其旨急度可被申付事、

一 何方見分仕候とも、私領方よりの音物等も一切受用無之筈に候間、音物ハ不及申、使者飛脚被出候儀も堅ク可為無用事、

一 右之面々家来下々迄、在々におゐて衣類、道具等ハ買不申様ニ申渡候間、得其意商買不仕様ニ可被申付事、

一 野道の馳走として、新規茶店等作り候義堅ク可為無用事、

以上のような諸注意は、これからの巡見使の基本的な順守事項となった。「雜書」延享三年(二七四六)一月八日条に全く同様の規定が記録されていることからわかる。

なお、七代將軍徳川家継は正徳五年（一七一五）十二月二十二日に公領の巡察を命じているが、諸国への巡見使の派遣はしなかったようである。²⁵⁾

四 徳川吉宗時代の巡見使

まず最初に、吉宗について簡単に触れておこう。彼は貞享元年（一六八四）十月二十一日、徳川御三家の和歌山（紀州）藩二代藩主徳川光貞の四男（あるいは三男）として和歌山の城で生まれた。母は側室於由利（巨勢八左衛門利清の女、浄円院）。幼名源六、新之助、実名ははじめ頼方、のちに吉宗を名乗った。元禄八年（一六九五）十二月、十二歳で江戸に出府、同十年四月、五代將軍徳川綱吉から越前国（福井県）丹生の郷鯖江の地三万石を賜り、葛野藩主となった。宝永二年（一七〇五）五月十四日、二代藩主だった長兄綱教の死去により、次兄頼職が後を継いで四代藩主となったが、九月八日に病死したため、同年十月六日、二十二歳で和歌山五万石を相続して五代藩主に就任した。宝永二年十二月一日になると、將軍綱吉から一字を拝領して吉宗と改名した。正徳六年（一七一六）四月三十日（この年は六月二十二日に享保と改元）に七代將軍徳川家継が八歳で死去したので、吉宗が徳川宗家を継承して八代將軍となった。將軍宣下は享保元年（一七一六）八月十三日だった。²⁶⁾

吉宗は元禄時代以来の華美と放漫な支出によって破産状態となっていた幕府財政の再建に着手した。いわゆる享保の改革を推進して財政を再建し中興の英主と讃えられたことである。²⁷⁾

さて、吉宗は享保元年（一七一六）七月十八日に諸国巡見使を任命し、同二十一日に巡見使の担当部署を決定した。「陸奥、出羽、松前は使番曾我平次郎長祐、書院番小笠原三右衛門信重、高城孫四郎清胤」の三人だった。²⁸⁾ 次いで七月二十八日には、次のような諸国巡見使条目を発布した。²⁹⁾

このたび諸国に巡視の御使たてらるといへども、国城の図を新に制し、戸口の員数あらたむることにあらざれば、その心してあるべし。御朱印の券にのせられし外、役夫、駅馬を用る時は各その価をとりて出すべし。城主、領主より使者、音物を贈るべからず。道途麗掃に及ばず。橋梁のみ修復を加え、往来のたよりよからしむべし。旅館、茶店あらたに設けるに及ばず。菽粟をはじめ、もとむるものあらば、その地の価をもてひきぐべし。……旅館の筵席あらたに改るにおよばず。浴室、廁なども粗薄に設け、飲食の什器ふるきままを用ゆべし。もしたらざらんには粗略に製すべし。宿るべき旅舎、一村にたらざる時は寺院にても、または外村にても事たるべし。その地に乏しき品を運致して、不時の用をまつことはあるべからず。

右の条目からもわかるように、吉宗は諸藩が無用な警戒心をおこしたり、無益な出費をしないように注意を与えているが、迎える側の諸藩にとって

はあまり歓迎できる使節ではなかった。なお、この巡見使条目は徳川綱吉が延宝九年（一六八一）二月三日に発布したものと同様のものだった。

享保二年の奥羽松前巡見使には、前年の七月二十一日に決定していた御使番曾我平次郎に代わって御使番の有馬内膳が加わり、書院番の小笠原三右衛門と高城孫四郎の三人となった。彼らは享保二年七月十七日に弘前領狩場沢から盛岡領二本級に入り、野辺地に到着すると、案内人に任命されていた御頭本堂源右衛門、御元締江刺家兵左衛門、御目付岡田清左衛門の三名が巡見使にお会いした（七月十九日、二十日条）。また、御使者に任命されていた御番頭の内堀帯刀が七代藩主南部利幹の口上を、

公方様益御機嫌能被成御座、御同然奉恐悦候、将又残暑御座候得共、各様愈御堅固御巡見可被成珍重存候、此節私領内へも、御移可被成と存候、道中御様子可承、以使者申入候、御慰にも御召可被成哉と馬為牽進候、と述べたのに対して、巡見使からは

是迄預御尋忝奉存候、公方様倍御機嫌能被成御座奉恐悦候、殊御手前様御堅勝被成御座、乍憚珍重奉存候、御馬迄被遣被下、段々被入御念、忝仕合奉存候、於御城下御礼可申上候、と返答があった（七月二十二日条⁽³⁰⁾）。

巡見衆一行は七月十七日に野辺地で一泊したのち、横浜、泊、根井沢、市川、田山、沼宮内、渋民などを經由して八月一日に盛岡の御飯屋（藩の公的な接待施設）に到着した。この時、家老の漆戸玄蕃が長坂まで、町奉行の青木勘兵衛と下条図書の人々が上田升形まで迎えに出た。巡見使が御飯屋に着いたらすぐ藩主利幹がお見舞いに参上するはずだったが、昨夜中から疝氣で不快だったので、中野伊織が名代を勤めた。家老の榎山弾正と漆戸玄蕃が「御機嫌伺いのため、三御飯屋」へ参上した。

こうして盛岡で一泊した巡見衆一行は、八月二日の午前九時に仙台へ向かって出発したので、町奉行の青木と下条は仙北組丁の中ほどまで出かけて見送った。

五 徳川家重時代の巡見使

はじめに徳川家重について簡単に触れておこう。家重は正徳元年（一七一）十二月二十一日、八代將軍徳川吉宗の長男として和歌山で生まれた。母はすま子（大久保八郎五郎忠直の女、深徳院）。幼名は長福。延享二年（一七四五）九月、吉宗は將軍職を長男の家重に譲って隠居したので、同年十一

月二日、家重が將軍宣下を受けて九代將軍に就任した。⁽³¹⁾

延享二年（一七四五）十月二十八日、將軍家重は諸国に巡見使を派遣することにして、奥羽松前巡見使に御使番の山口勘兵衛直意、西丸御小姓組の神保新五左衛門長勝、書院番の細井金五郎勝尚の三名を任命した。⁽³²⁾「雜書」延享三年一月八日条によると、巡見使に関する詳細な書き付けは、延享二年閏十二月付けのもので、それは酒井雅樂頭から溝口出雲守の御留守居に渡され、さらに盛岡藩の江戸御留守居に伝えられた。⁽³³⁾その内容は、六代將軍家宣時代に出された諸国巡見使条目と同じであった。ごく簡単に要約すれば次のようなものである。

- ① 巡見筋の道路の掃除と橋の築造を禁止すること。送迎の人を出させないこと。
- ② 朱印の員数以外の人馬は所定の駄賃錢を支払って雇うこと。
- ③ 巡見使の通行時も農作業を続行させること。
- ④ 宿の畳替えはしないで古くてもかまわない。
- ⑤ 宿になる家が一村に三軒ない所は、寺や隣村のものまで使用すること。
- ⑥ 泊まりや昼休みの場所が必要とする品物は、その土地の相場次第で購入すること。
- ⑦ その土地にない商品を他村から購入させないこと。衣類、諸道具、酒、肴を持ち寄つての商売は厳禁とすること。
- ⑧ 巡見使への贈り物は禁止、もし内密に贈り物をした者は処罰する旨を厳しく申し付けること。
- ⑨ 大名からの贈り物の受容と使者飛脚を厳禁とすること。
- ⑩ 巡見使の家来たちへ衣類や諸道具を商売しないこと。
- ⑪ 新規に茶店等を造ることは厳禁とすること。

右のような一か条からなる諸注意のあとに、七か条と五か条からなる「覚」も伝えられたので（延享三年一月八日条）、次に紹介しておこう。

覚

- 一 今度諸国巡見雖被 仰付、国絵図、城図無用之事、
- 一 人馬家数改無之事、
- 一 御朱印之外之人馬、御定之通駄賃錢取之、無滞可出之事、
- 一 何方を見分仕候共、使者、飛脚、音信物一切可為無用事、但、案内之者入候所は其断可有之事、

一掃除等可為無用候、但、有来道橋往来不自由之所は各別之事、

一泊々之宿所作事等可為無用候、并茶屋新規二作之申間鋪事、

一廻之面々泊々にて搗米、大豆、以其所之相場可売之、此外之売物常々其所之直段ニ売可申事、

以上

丑閏十二月

覚

一宿々畳之表替え無用ニ候、古候共不苦事、

一湯殿、雪隠、若無之所は成程軽く可致事、

一鹽、柄杓、鍋、釜古候共不苦候、若無之所ハかろく可被致支度事、

一宿になるへき家、一村に三軒無之所は、寺ニても又は隔候ても不苦事、

一其所ニ無之売物、脇より遣置之、うらせ申間鋪事、

以上

丑閏十二月

延享三年（一七四六）の巡見使一行は三月十五日に江戸を出発し、享保二年（一七一七）の巡見使が廻った順番どおり（三月二十一日条、奥州入り口から出羽、弘前領を経て松前に行き、六月二十日順風にて松前出帆（七月二日条）、再び弘前領から盛岡領へと進むルートをとった。

一行は六月二十二日に弘前領の狩場沢から盛岡領へ入り、二本級に到着したので、布施浅右衛門、佐藤甚之丞、梅内忠右衛門の三名が出迎えた（六月二十四日条）。同日は野辺地に一泊したが、巡見使の神保新五右衛門が松前巡見中から病気になったので、若殿の信貞（のちの九代藩主利雄）が見舞いのため、御目付の小向四郎兵衛を使者に立て、「残暑之節、御旅中傍御保養專一存候、猶又御様子承度、為御見廻、以使者申入候」と口上で申し入れている（六月二十七日条）。一行は六月二十八日に櫛引八幡宮を視察（七月一日条）、七月五日に六日町の御飯屋へ到着した。七月六日盛岡を出発して郡山（日詰）、大迫（泊）、大沢、花巻（泊）を経由し、八日には鬼柳御境を通って仙台領へと移動している（七月九日条）。なお、巡見使一行が盛岡を

出立したのは七月六日のことであつたが、その翌日の「暮頃より大雨にて新山大水ニ罷成、舟橋板引取候内、鍍（鎖）綱切、橋不残流、人足も舟に乗候は流、尤通路相止候」という北上川の大洪水が発生した。⁽³⁴⁾一行はこの被害を受けることなく盛岡を後にすることができたのである。

六 徳川家治時代の巡見使

一〇代將軍徳川家治の巡見使派遣は、宝暦十一年（一七六一）のことであつた。このことを検討する前に、家治について簡単に触れておくことにしよう。家治は元文二年（一七三七）五月二十二日、九代將軍徳川家重の長男として江戸城西丸で生まれた。母はお幸（藤原通條Ⅱ梅溪の女、至心院）。幼名を竹千代と称した。宝暦十年五月十三日家重の後を受け、九月二日將軍宣下を受けた。二六年間在職したが、政治の実権は田沼意次に握られ、能力を発揮することができなかった。天明六年（一七八六）九月八日（実は八月二十五日）に没し、上野寛永寺に葬られた。⁽³⁵⁾

さて、將軍家治時代の奥羽松前巡見使は御使番の榊原左兵衛職尹、西丸御小姓組の布施藤五郎正久、同書院番の久松彦左衛門の三人であつた。⁽³⁶⁾この巡見衆は宝暦十一年七月一日に弘前領から盛岡領に入り、同十三日に盛岡で一泊する予定であつた。特にこの節は盆中なので、九代藩主の南部利雄は次のように仰せ出された。⁽³⁷⁾

一十三日仏參等相止可申事、

一十四日晚より十七日迄、勝手次第仏參等可仕事、

一門火ハ例年之通、十四日より十六日迄炊可申事、

一十二日より十三日晚、高燈籠釣候儀無用可仕事、^(行燈)

一明物之外、年々致来候通之儀は、十四日晚より不苦候、乍然此御時節之儀候間、遊興ケ間敷儀、或ハ為見物（見世物）之類無用可仕事、
一寺院におゐて仏事執行之儀可為勝手次第事、

但、十二日より十三日晚は高挑灯釣候儀は無用可仕事、^(提灯)

右之通被 仰出候間、相触候様、御目付へ申渡、寺社御町へは寺社御町奉行より相触之、

右のような藩主の仰せは御目付から触れさせ、寺社や城下へは寺社御奉行から触れることになった。⁽³⁸⁾七月十二日になると、巡見衆が盛岡に止宿するので、家老の北民部節繼の名代の使者が、三巡見使に対して口上で、

公方様、此節御機嫌能御障不被成御座奉恐悦候、将亦此度御巡見御太儀存候、依之、以使者申述候、と述べたのに対して、三巡見使からは

公方様、此節御機嫌御障不被成恐悦御同意奉存候、将亦此節御手前様弥御勇健珍重奉存候、於御当領、是迄万端御叮嚀^(下座)之御次第、誠以忝次第奉存候、且御叮嚀^(下座)之預御使者、是又忝仕合奉存候、

と直答があつた(七月十二日条)。

これ以降になつて、お見舞いの御使者として御物頭の八木橋茂左衛門が榊原へ、同じく御物頭の野辺地忠左衛門が布施へ、御長柄頭の藤田武左衛門が久松へ派遣された。⁽³⁹⁾

巡見衆は七月十二日に盛岡で一泊し、翌日の朝六時に出駕したので、升形まで使者が派遣された。榊原へは塩川八右衛門、布施へは伴金右衛門、久松へは原平兵衛が勤め、「弥無御恙、今日爰許御発足可被成存候、依て為御見廻、以使者申入候」と口上した。七月十六日になると幕府に対して、

榊原左兵衛殿、久松彦左衛門殿、布施藤五郎殿、私領内御巡見相済、昨十五日領分境、從鬼柳と申所、仙台領へ被相越候、此段御届申上候、以上、

七月十六日

南部大膳大夫^(利雄)

と届書を提出している。⁽⁴⁰⁾

七 徳川家斉時代の巡見使

天明八年(一七八八)の場合の巡見使は、十一代將軍徳川家斉によつて派遣されたものである。まず最初に、家斉について若干触れておこう。

家斉は安永二年(一七七三)十月五日、御三卿の一橋治済の長男として江戸城内の一橋邸で生まれ、幼名を豊千代と称した。母は富子、おとみの方(岩本内膳正正利の女、慈徳院)。天明元年閏五月十八日、十代將軍徳川家治の世子となり、十二月二日に家斉と名乗り、同二年四月三日元服。天明七年四月十五日に將軍宣下を受けた。その年の六月十九日に老中首座となつた松平定信らによる寛政の改革が始まつたが、寛政五年(一七九三)七月二十三日に定信が老中を辞職したのちは、松平信明らの老中を指揮して幕政を運営した。⁽⁴¹⁾しかし、文政元年(一八一八)以降は側近政治が進み、天保八年(一八三七)年四月二日に將軍職を次男の家慶に譲つて隠居したが、その後も大御所として政治の実権を握り、同十二年閏一月三十日に没した。⁽⁴²⁾六九歳、諡名は文恭院。墓所は東叡山寛永寺。なお、好色だつた家斉は側室を四〇人、子供を五五人もうけたことでも有名だつた。⁽⁴³⁾

天明八年の奥羽松前巡見使には、御使番で一五〇〇石の藤沢要人輔長が正使となり、御小姓組で二七〇〇石の川口久助恒久と西丸書院番で一〇〇〇石の三枝十兵衛守苗の両名が副使に任命された。この三人にはそれぞれ家来が従者となったので、総勢では一一七名という大部隊であった。⁽⁴⁴⁾

巡見使一行は天明八年五月六日に江戸を出発、奥羽地方から松前を巡察して、江戸に帰ったのが十月十八日で、五カ月余にわたる旅であつた。帰国した彼らを持っていたのは、巡見中に家来の不行跡があつたということで小普請入り（職務上の過失で役を免ぜられた者が、禄高二〇〇石から三〇〇〇石の非番の旗本に編入されること）という処分であつた。普通なら「ご苦労さん」というところだが、時あたかも松平定信による寛政の改革中で、厳格を極めた政治が行われていたので、ちよつとした過失でも咎められたのである。

このような処分は徳川吉宗も行っていた。関八州を巡視した正使の御使番荒川内記定由、副使の御小姓組御手洗新太郎正矩と書院番富永源右衛門計豊は「疎脱おほくして、民の艱苦をもよく査検」⁽⁴⁵⁾しなかつたので、享保二年（一七一七）二月十九日に荒川は小普請入り、御手洗と富永は押込めという処分を受けた。

さて、寛政の改革当時の情勢について、江戸の商人筆屋忠左衛門は仙台領の商人北沢屋嘉兵衛宛ての書状の中で、定信の政治が厳しく、隠密に隠し目付を出して、武家に少しでも悪事があると知られるので、「武けい学問弓馬」が盛んになったと伝えている。しかしその反面、幕府、諸大名、武家一般が儉約令を厳守したので、江戸では金銭が不通用となつて不景気になった。しかもこの不景気は天明七年の飢饉の年よりもひどかったという。江戸市中の消沈した様子が目に浮かぶようだ。

この時の巡見については、備中国（岡山県）出身の地理学者古川古松軒が副使の三枝十兵衛に随行して見聞したことを「東遊雜記」として残している。この時の実情がよくわかる。注目されるのは東北地方の農村の中でも、特に山形から秋田にかけての觀察記録の中に、「土間住居」という記述があることである。これは地面に藁や糞殻などを置き、その上に簾を敷いて寝泊まりするものである。藁や糞殻は保温という点ではそれほど悪くはなかったが、地熱と湿気でふやけるので非衛生的だった。そこで定期的に取り替えて、古いものは田畑の肥料にした。まさに人間が牛馬の代わりをしていたようなものだった。¹⁷古松軒は最初のうちは、東北地方の農村が貧しいので土間住居をしているのだと思っていたが、実は「お国風（おくにぶり）」で、領主による規制であつたことを明らかにしている。

さて、藤沢要人、川口久助、三枝十兵衛の三名からなる巡見使一向は、次のような行程をたどって盛岡に到着していた。天明八年八月二十五日に弘前領の刈和野（狩場沢）から盛岡領二本級御境へ入り、馬門を経て野辺地で一泊した。同二十六日野辺地、有戸、横浜（泊）、同二十七日横浜、中の沢（中野沢）、田名部（泊）、同二十八日田名部、小田の沢（小田野沢）、泊（泊）、同二十九日泊、尾駸、平沼（泊）、同三十日平沼、岡三沢、市川（泊）、

九月一日市川、八戸、八幡⁽⁴⁸⁾、劍吉、三戸（泊）、同二日三戸、田子、関（泊）、来満山中⁽⁴⁹⁾、大湯（泊）、同四日大湯、錦木塚、松山、尾去沢（泊）、同五日尾去沢、花輪（泊）、同六日花輪、小豆沢、湯瀬、田山（泊）、同七日田山、中佐井（浅沢）、浄法寺（泊）、同八日不明、同九日浄法寺、小繋、沼宮内（泊）、九月十日沼宮内、渋民を経て盛岡城下に到着して一泊した。江戸を立つたのが五月六日のことであつたから、すでに四か月が経過していたことになる。

ところで、巡見衆が盛岡に到着するまでとその後の様子を簡単にみることにしよう。天明八年（一七八八）八月二十八日には、六日町の検断小左衛門と十一屋伊兵衛、それに石町（穀町）の兵左衛門が「御巡見御宿」を仰せ付けられた。「雑書」天明八年九月三日条をみると、八月三十日に下市川の宿で、川口久助の家来川部八郎と御用人小林莊兵衛の兩人が江戸表の同家来中里政右衛門へ、同じく三枝十兵衛の御用人乙竹喜右衛門と戸田勘右衛門の兩人が同家来の古山儀左衛門宛てに、それぞれ「油紙包状箱」を届けてくれるように、案内の役人に頼んでいた。

巡見衆は天明八年九月十日の午前十時に渋民で休息したのち、午後四時に六日町と石町（穀町）の宿所に到着した。この日は家老の奥瀬安芸がカルサン（軽杉、袴の一種）を着用して長坂まで迎えに出たところ、巡見使の藤沢と三枝の兩名は駕籠からおりて挨拶した。川口は少々風邪気味だったので、代わって御用人の小林が挨拶した。御町奉行の相坂宇左衛門と小向周右衛門の兩名は上田升形先きまで迎えに出た。

家老の毛馬内三左衛門次相と桜庭肥後統意の兩名は、袴を着用して新町の多賀屋勘助の所へ詰め、供廻りは同町の穂積屋甚右衛門所で待機していた。巡見衆が盛岡に到着してから、午後八時に「巡見御用懸」の大巻勇助が多賀屋にやってきて打ち合わせをし、毛馬内が大巻の先導で「三御宿へ罷出、御口上」を次のように述べた。

公方様、益御機嫌能被成御座奉恐悦候、将又此度御巡見御太儀存候、依之、以使者申入候、此段江戸表より兼て申付越候、これに対して巡見使の三人は、

公方様益御機嫌能被成御座恐悦御同意奉存候、次御手前様弥御安泰珍重奉存候、於御当領、段々は迄万端御丁寧之御儀奉存候、被入御念預御使者、忝仕合奉存、右之趣、江戸表へ宜申上候様被仰聞之、

と直答した（九月十日条）。

一方では、随行員の病死という出来事もあった。川口久助の御徒鈴木伝八はかねてから病氣だったので、小寺玄仲が「段々薬用いたし候得共不相叶、今夜石町御宿にて病死」した。そこで川口の御用人小林甚兵衛が諸事軽くして近所の寺に葬りたいというので、川原町の円光寺へ埋葬した（九月十日条）。

巡見衆一行は九月十一日の朝に盛岡城下を出発したので、見送りのため、家老の毛馬内藏人直祝は袴を着用して新山船橋向かい西側の柵際に出かけ、供の者は仙北町境の柵際で見送った。その後の巡見は郡山(白詰)、大迫、大沢へと進み、九月十三日に花巻を出立して藩境の鬼柳を通過して仙台領の水沢へと向かった。

ここで、天明八年時の巡見使が踏査した地点を『東遊雜記』に基づいて列挙すると、次のようになる。若干繁雑になるが、巡見ルートを確認することができるので、あえて掲げることにした。

天明八年五月六日、巡見使一行は江戸を出発して千寿(千住)の駅で休息したのち、草賀(草加)、越ガ谷(越谷、泊)、粕壁(春日部)、栗橋、中田、古河(泊)、野木、間々田、小山、芋栖(いもす)、小金井、石橋、雀の宮、宇都宮(泊)、白沢、氏家、喜連川、作山(佐久山、泊)、太田原、鍋掛、下野国(栃木県) 芦野と巡って奥州に入った。

奥州の白坂から白川(白河、泊)、関山、白川(白河) 城下(泊)、飯土用(いいとよ、飯豊)、上古屋(隈戸)、牧内(牧之内)、長沼(泊)、勢至堂、福良(泊)、原、若松城下(泊)、関山、大内(泊)、倉谷、田島(泊)、糸沢、田島(泊)、針生、古町(泊)、梁取、布沢(ふざわ、泊)、野尻(泊)、大谷(泊)、塩野、柳津(泊)、坂下(ばんげ)、高田(泊)、大寺、猪苗代(泊)、中山、苗代田(泊)、本宮、郡山(泊)、守山、須賀川(泊)、巢蜘蛛(すくもづか)、小野新町(にいまち、泊)、常葉(ときわ)、三春城下(泊)、小浜(泊)、二本松城下(泊)、福島(泊)、飯野、小総木(小綱木、泊)、越田、梁川(泊)、貝田、桑折(泊)、福島、庭坂(泊) を経て出羽国(山形県) の板谷へ入る。

そこから大沢(泊)、米沢城下、綱木(泊)、米沢、上小松(泊)、手の子、白子(白子沢、泊)、小国(泊) を通り、越後(新潟県) との国境いの玉川、小国(泊)、米沢城下(泊)、綱木、高島、湯の沢(泊)、金山、上の山、長谷堂(泊)、畑屋、山形城下(泊)、中野、天童(泊)、寒河江、白岩、谷地(泊)、楯岡(村山)、尾花沢(泊)、舟方(舟形)、新庄(泊)、清水、土湯(泊)、清川、藤島、鶴ガ岡(鶴岡) 城下(泊)、手向、羽黒山、鶴ガ岡(鶴岡) 城下(泊)、湯村(湯田川)、菅野代(すがのだい)、小国(泊)、鼠ガ関(念珠関)、湯温泉(ゆあつみ、泊)、三瀬(さんぜ)、大山(泊)、酒田(泊)、青塚(比子)、吹浦(ふくら、泊)、有耶無耶関、小砂川(こさかわ)、潮越(しおこし、象潟、泊)、平沢、本荘(泊)、松ガ浦、新沢(あらさわ、泊)、小栗(小栗山)、老方(おいかた、泊)、大沢、西馬音内(にしもない、泊)、湯沢、横手、金沢(かねさわ)、六郷、花館(大曲、泊)、刈和野、境(泊)、戸島と巡回して久保田(秋田) 城下(泊) へ、そこから大久保、一日市(ひといち、泊)、豊岡、野代(能代、泊)、飛根(富根)、荷上場(泊)、小繋、綴子(つづれこ)、大館(泊)、白沢などを巡見。それから弘前領の碓の関(泊)、蔵館、大鰐、石川、弘前城下(泊)、浪岡、油川(泊)、蟹田、平館(泊)、今別、三馬屋(三厩、泊) に至たる。

ここから船で松前に渡り、さらに江良（えら、泊）、児砂（小砂子）、上の国（泊）、江指（江差、泊）、乙部、江指（江差、泊）、児砂（泊）、松前（泊）、福島（泊）、一の渡、知内（しりうち、泊）、泉沢、戸切知（へけれち、上磯、泊）、亀田、戸切知（泊）、泉沢、知内（泊）、福島（泊）、松前（泊）と巡った後に、再び船で三馬屋（三厩）に戻り、それから襲月、青森（泊）、浅虫、小湊（泊）と巡見し、弘前領の刈和野（狩場沢）から盛岡領の馬門に入る。

そこから北郡（下北半島）の野辺地（泊）、有戸、横浜（泊）、中の沢（中野沢）、田名部（泊、むつ）、小田の沢（小田野沢）、泊（泊）、尾駸、平沼（泊）を巡り、岡三沢（三沢）から市川（泊）、八戸、八幡、剣吉、三戸（泊）、田子、関（泊）、来満山中、大湯（泊）、錦木、松山、尾去沢（泊）、花輪（泊）、小豆沢、湯瀬、田山（泊）、中佐井（浅沢）、浄法寺（泊）、小繋、沼宮内（泊）、渡民などを視察して盛岡城下（泊）に到着した。

盛岡からは郡山、大迫（泊）、花巻（泊）へと進み、鬼柳、水沢（泊）、岩屋戸（岩谷堂）、伊手（泊）、大股（泊）、横田を巡見し、仙台領の高田から今泉（泊）、気仙沼（泊）、津谷、狼河原（泊）、藤沢、千厩（泊）、松川、中尊寺（泊）、達谷、一の関（泊）、有壁、金成（泊）、姉齒、若柳（泊）、佐沼、柳津（泊）、辻堂、石の巻（泊）、北村、涌谷（泊）、古川、中新田（泊）、吉岡、松島（泊）、塩竈を経て仙台城下（泊）に到着した。そこから岩沼、大河原（泊）、白石城下、越河、白石城下（泊）、角田、金山（泊）へと進み、坂元からは浜街道を南下して駒ガ嶺（泊）、中村城下（泊）、原の町、小高（泊）、高野、富岡（泊）、四ツ倉、平城下（泊）、小名浜、植田（泊）へ至り、さらに上遠野（泊）から石住、竹貫（泊）、室来、棚倉城下（泊）、東館、下関（泊）、大中、太田（泊）、枝川、長岡（泊）、府中（石岡）、牛久（泊）、吾孫子（我孫子）、千寿（千住、泊）と巡って、十月十八日に江戸に帰った。約五か月半に及ぶ巡見の旅だった。

八 徳川家慶時代の巡見使

はじめに徳川家慶について簡単に触れておこう。彼は寛政五年（一七九三）五月十四日、十一代将軍徳川家斉の四子として江戸城で生まれた。母は側室榮子、お栗の方（押田勝次郎敏勝の女、香琳院）。幼名は敏次郎。天保八年（一八三七）九月二日に将軍宣下を受けて十二代将軍となったが、大御所となった家斉とその側近に幕政を牛耳られ、実権を掌握することができなかった。しかし家斉の死後、天保十二年から老中水野忠邦をして天保の改革を断行させ、内憂外患の危機を打開しようとしたが、ペリー来航直後の嘉永六年（一八五三）七月二十二日、対外的危機が深刻化しているさなかに没した。⁵⁾

天保九年（一八三八）の奥羽松前巡見使には、黒田五左衛門、中根伝七郎、岡田右近の三人が任命された。この巡見衆一行は、同年七月三日午後一時頃に弘前領から盛岡領の二本級御境へ入り、午後二時に野辺地御泊りへ到着した。⁽³²⁾七月七日になると、巡見使のうちの中根伝七郎が病氣ということなので、盛岡藩では御目付枋内与兵衛を使者として野辺地へ派遣した。中根は松前の地から病氣となり、野辺地に到着しても同篇なので、同所から本道（奥州道中とか奥州街道）を廻って三戸で逗留して仲間の黒田と岡田を待つことにしたが、そのまゝ旅行して七月十二日に盛岡へ到着した。そこで家老の戸沢駿河が出迎えとして本町へ罷り出ていたところ、夕方に通行した中根は病氣ながら強いて下乗して挨拶された。⁽³³⁾

七月十六日、中野伝七郎を除いた巡見衆一行は浪民で休息したのち今晚盛岡に到着することになっていたので、家老の戸沢は朝の一〇時過ぎから本町の常陸屋伝右衛門の所へ詰めていた。午後四時に黒田と岡田の両人が通行するので、戸沢は出迎えのために大手先へ出かけていたところ、巡見使の両人が駕籠から下乗して挨拶した。一行は盛岡で逗留して同十八日午前七時に六日町を発足したので、見送りとして家老の戸沢は袴を着用して「川原丁新山橋詰御番所前」へ出かけ、鍵、挟箱、立傘、引き馬などは柵際のところ置いた。戸沢が詰めていたところに黒田がやって来て下乗し、丁寧の挨拶があった。この日は少々雨天だったので、双方ともに立傘を使用した。ほどなく岡田もやって来て同様の行動をとった。こうして巡見使の見送りが済んだので家老の戸沢は引きあげた。

ところで、松前から病氣にかかっていた巡見使の中根伝七郎は、盛岡へ到着してから「養生不相叶」、七月十八日の午前七時に病死した。⁽³⁴⁾長期にわたる巡見の旅だったので、このようなこともあったのである。

おわりに

江戸幕府が原則として將軍の代替わりごとに、地方の実情を視察することを目的として、諸国へ派遣したのが巡見使である。寛永十年（一六三三）、三代將軍徳川家光の時ものが例となり、五代將軍徳川綱吉の時から全国を八地域に分けて巡視するのが定着した。

本稿では、盛岡藩の家老席日記である「雑書」〔盛岡藩雑書〕〔盛岡藩家老席日記雑書〕を主たる史料として、巡見使を迎える盛岡藩の行動について考察してみた。そこで知り得た主なことは次のとおりである。

奥羽松前巡見使は三名からなり、正使には御使番、副使には御小姓組と書院番のものが各一名ずつ任命されるのが一般的であるが、時には、御小姓組あるいは書院番から二人が任命されることもあった。三名の巡見使にはそれぞれの家来が随行したので、総勢では一〇〇人前後の大部隊となった。広

大な盛岡領内の巡見には大体一六日〜一七日間を必要とした。江戸を出てから帰府するまでに約五か月半を要する長途の旅だった。

徳川綱吉や吉宗が発布した巡見使条目は、巡見使を迎える側での無用な警戒心と無益な出費を戒めている⁽⁵⁵⁾。しかし迎える側ではそのとおりにはいかなかった。盛岡藩では、巡見使が宿泊するための御飯屋普請に関わる役人や道橋普請の責任者などを任命していたことを考えれば、巡見使を迎えるにあたって最善の注意を払っていたことがわかる。天明八年（一七八八）七月一日、民俗学者で紀行家の菅江真澄は蝦夷地を目指して盛岡城下北方の芋田（盛岡市玉山区）から川口（岩手町）の辺りを旅していた。その時、巡見使を迎えるために農民たちが炎天下に道普請にかり出されているのに遭遇した。彼は旅行記「岩手の山」の一節で、作業をしている農民の額には、人改めの印しの文字がかかれており、その墨が汗で流れて顔がますます黒くなって暑そうだと、村人を気遣っていた。藩では道を改修することによって、巡見使の印象を良くしようとしたのである。その改修された道を、約二ヵ月後の九月一日に巡見使一行が通ったのだが、古松軒は農民が苦勞して改修した道に気づいていなかった⁽⁵⁷⁾。

弘前領から下北半島の盛岡領に入った巡見使一行は、あらかじめ決められていた巡見地を踏査して秋の間（七月〜九月）に盛岡城下に到着した。盛岡領に入ってから城下盛岡に達するまでに大体一四日ぐらいいかった。幕府から「場広」といわれていた広大な盛岡領の巡見は、延宝九年（一六八一）六月の仙台藩郡奉行への回答によれば、「日数十八日之苦」であった⁽⁵⁸⁾。宝永七年（一七一〇）には「御領内ハ十五日振（一四泊一五日の行程）」で巡廻する予定であったが、実際は一六日間を要した。

巡見使が盛岡城下に到着する直前に、家老は威儀を正して、黒石野と小野松一里塚との中間に位置する長坂まで迎えに出るのが慣例となっていた。二人の町奉行は上田一本松か上田升形まで出向いた。見送りの場合は、家老が袴などを着用して新山舟橋の所まで、町奉行両名は仙北組丁の中ほどか、升形まで出かけるのを常としていた。宝永七年の時は、家老の江刺舎人と野田典膳の両名が藩境の鬼柳まで出向いていた。

表2 巡見使と盛岡城下到着日

将軍	巡 見 使	盛岡到着日
5代綱吉	保田甚兵衛、佐々喜三郎、飯河伝右衛門	延宝 9年(1681) 8月 26日
6代家宣	細井左次右衛門、北条新左衛門、新見七右衛門	宝永 7年(1710) 7月 26日
7代家継	(不派遣)	
8代吉宗	有馬内膳、小笠原三右衛門、高城孫四郎	享保 2年(1717) 8月 1日
9代家重	山口勘兵衛、神保新五左衛門、細井金五郎	延享 3年(1746) 7月 5日
10代家治	榊原左兵衛、布施藤五郎、久松彦左衛門	宝暦 11年(1761) 7月 12日
11代家斉	藤沢要人、川口久助、三枝十兵衛	天明 8年(1788) 9月 10日
12代家慶	黒田五左衛門、中根伝七郎、岡田右近	天保 9年(1838) 7月 16日

注 (1) 「雑書」、「盛岡藩雑書」、「盛岡藩家老席日記雑書」、「東遊雑記」、「徳川実紀」、「続徳川実紀」などから作成。

(2) 巡見使は盛岡に到着した翌日にはすぐ出発しているが、天保9年(1838)だけは7月16日に到着して同18日に出発している。1日間逗留した理由は不詳。

巡見使の全行程を知ることのできる『東遊雜記』によれば、天明八年（一七八八）五月六日に江戸を出立した巡見使は、奥羽松前地方を巡察して帰府したのが十月十八日のことで、約五カ月半に及ぶ長途の旅であった。お役目ご苦労さんと言いたところだが、彼ら待っていたのは、巡見中に家来の不行跡があったということで小普請入りの処分であった。また、長期間の巡見のため、巡見使や従者などが客死することもあったのである。

注

- (1) 「雑書」延宝九年二月十日条（細井計責任校閲『盛岡藩雑書』第四巻、五九七頁、熊谷印刷出版部、一九九〇年十月）。
- (2) 「東遊雜記」天明八年（一七八八）九月一日条には次のように記されている（同書、二〇五頁、平凡社、一九六四年九月）。
 予がかしずき参らせし三枝殿は至つての馬好きにて、数多の馬を御覧ありて御案内の者へ御尋ねには、牧の馬の野原にて子を産せし時に、人にも行ききて育つことや、そのままにても育つこととありしに、案内の者答えに、さようのことは存じ申さずという。また御尋ねあるには、里子（これは家の内にて、子を産ませるをいう）はいかがせると御尋ねあるに、さようのことも存ぜずという。三枝殿も少し御怒りの御顔色にて馬をさし給い、あれは何というものぞと御尋ねありしかば、ぞんじ申さずという。この時御駕籠脇にありし人びと、汝は大馬鹿者の正真なり、退きて外の者を出すべしとて大いに呵りしかば、この者恐れ入りし体にて、何やら懷中より取り出して見れば、御巡見使より御尋ねの品じなに御答え申し上げる覚書にて、その終りにこの外のことを御尋ねあらば存じ申さずと御答え申すべしとの、領主役人より渡されし書付なり。皆みな大いに笑いて興となりぬ。これらのことを帰府のちに人びとに語り聞かすとも、誰か誠とおもうべき。くれぐれも不思議の地へ来たりしことなり。
- (3) 『国史大辞典』第七巻、四一四頁、吉川弘文館、一九八六年十一月。
- (4) 盛岡市中央公民館所蔵。
- (5) 「雑書」については、すでに細井計「南部と奥州道中」二二〇～二二二頁（吉川弘文館、二〇〇二年五月）、同「徳川綱吉政権と盛岡藩」（『東北福祉大学研究紀要』第31巻、二〇〇七年三月）などで触れておいた。
- (6) 「常憲院殿御実紀」（『徳川実紀』第五篇、三五三～三五五頁、吉川弘文館、一九六五年四月）。
- (7) 同右、三七〇頁。
- (8) 「文昭院殿御実紀」巻一（『徳川実紀』第七篇、三頁、吉川弘文館、一九六五年四月）。
- (9) 細井計「徳川綱吉政権と盛岡藩」（前掲『東北福祉大学研究紀要』第31巻）。
- (10) 「常憲院殿御実紀」（前掲『徳川実紀』第五篇、三五四頁）。
- (11) 「常憲院殿御実紀附録巻上」（『徳川実紀』第六篇、七三二頁、吉川弘文館、一九六五年八月）。
- (12) 前掲細井計論文。
- (13) 前掲「徳川実紀」第五篇、三九九～四〇〇頁。
- (14) 細井計責任校閲『盛岡藩雑書』第四巻、六九九頁、熊谷印刷出版部、一九九〇年十月。
- (15) 「雑書」延宝九年八月二十二日条（前掲細井計責任校閲『盛岡藩雑書』第四巻、六九六頁）。

- (16) 「北奥路程記」(『南部叢書』(七)、歴史図書社、一九七一年四月)。
- (17) 前掲細井計責任校閲『盛岡藩雜書』第四卷、六五〇頁。
- (18) 「文昭院殿御実紀」(前掲『徳川実紀』第七篇、二四八頁)。
- (19) 『朝日日本歴史人物事典』一一四〇頁、朝日新聞社、一九九四年十一月。『日本史広辞典』一五四四頁、山川出版社、一九九七年十月。
- (20) 「文昭院殿御実紀」(前掲『徳川実紀』第七篇、六一頁)。
- (21) 「雜書」宝永六年十一月二十日条(細井計責任校閲『盛岡藩雜書』第九卷、六七七頁、熊谷印刷出版部、一九九五年十二月)。
- (22) 同右、七七〇頁。
- (23) 細井計責任校閲『盛岡藩雜書』第十卷、三七一〜三七二頁、熊谷印刷出版部、一九九六年十二月。これと同様のものが「文昭院殿御実紀」正徳二年(二七一
二)八月十六日条(前掲『徳川実紀』第七篇、二四〇〜二四一頁)にある。
- (24) 細井計責任校閲『盛岡藩家老席日記雜書』第二十卷、九頁、東洋書院、二〇〇七年三月。
- (25) 「有章院殿御実紀」に「勘定の属吏等、公料の地巡察を仰付けらる」(前掲『徳川実紀』第七篇、四四八頁)とある。
- (26) 「有徳院殿御実紀」(『徳川実紀』第八篇、一〜二頁、二六頁、吉川弘文館、一九六五年十一月)。
- (27) 前掲『日本史広辞典』一五四七頁。前掲『朝日日本歴史人物事典』一一四六頁。
- (28) 「有徳院殿御実紀」(前掲『徳川実紀』第八篇、二二頁)。
- (29) 前掲『徳川実紀』第八篇、二四頁。
- (30) 細井計責任校閲『盛岡藩雜書』第十一卷、三〇四頁、熊谷印刷出版部、一九九七年十二月)。
- (31) 「惇信院殿御実紀」(『徳川実紀』第九篇、三四一頁、三五一頁、吉川弘文館、一九六六年二月)。
- (32) 「惇信院殿御実紀」(前掲『徳川実紀』第九篇、三四九〜三五〇頁)。
- (33) 細井計責任校閲『盛岡藩家老席日記雜書』第二十卷、九〜一〇頁、東洋書院、二〇〇七年三月。
- (34) 同右、一〇一頁。
- (35) 「浚明院殿御実紀」(『徳川実紀』第十篇、一〜二頁、一七頁、八一〇頁、吉川弘文館、一九六六年四月)。前掲『朝日日本歴史人物事典』一一四〇頁。
- (36) 「浚明院殿御実紀」(前掲『徳川実紀』第十篇、三九頁)。
- (37) 盛岡市中央公民館所蔵「雜書」宝暦十一年七月五日条。なお、この年の「雜書」はまだ刊行されていない。
- (38) 同右。
- (39) 「雜書」宝暦十一年七月十二日条。
- (40) 「雜書」宝暦十一年七月十六日条。
- (41) 「文恭院殿御実紀」(『統徳川実紀』第一篇、一頁、二六頁、三五頁、一三二頁、吉川弘文館、一九六六年六月)。
- (42) 「慎徳院殿御実紀」(『統徳川実紀』第二篇、三二七頁、四二四頁、吉川弘文館、一九六六年九月)。
- (43) 前掲『朝日日本歴史人物事典』一一四〇頁。
- (44) 細井計「書状をとおしてみた天明・寛政期」(『宮城史学』第二号、一九七二年三月)、のち『近世東北農村史の研究』に所収、二五二頁、東洋書院、二〇〇〇

二年四月。

(45) 前掲『徳川実紀』第八篇、五八頁。

(46) 細井計『近世東北農村史の研究』二二八頁。

(47) 児玉幸多『近世農民生活史』一八二頁、吉川弘文館、一九六一年五月。

(48) 天明八年九月一日、巡見使一行は市川を出立して三戸へ向かう途中、八幡村に鎮座している八幡宮(櫛引八幡宮)を視察した。ここは「宝物の数かずありて真物のよきものばかり揃いし所」で、「江戸を出でしより当八幡宮の宝物」が第一であって、古川古松軒は「世に珍しき物を一見」できたと喜んでいて(前掲『東遊雜記』二〇六頁)。

(49) 「来満山中」という所は、「深山幽谷の中」にあつて、巡見使の休憩のために新設された「おたすけ茶屋」が一軒あるだけだった(前掲『東遊雜記』二〇九頁)。一般的に「おたすけ茶屋」というのは、旅人救難のために設けられた茶屋のことである。

(50) 盛岡市中央公民館所蔵。天明八年(一七八八)の「雜書」はまだ刊行されていない。

(51) 「慎徳院殿御実紀」(前掲『統徳川実紀』第二篇、七一四頁)。前掲『朝日日本歴史人物事典』一一四一頁。

(52) 盛岡市中央公民館所蔵「雜書」天保九年(一八三八)七月六日条。なお、この年の「雜書」はまだ刊行されていない。

(53) 同右、七月十二日条。

(54) 同右、七月十八日条。

(55) 前掲『徳川実紀』第五篇、三九九、四〇〇頁。同『徳川実紀』第八篇、二四頁。

(56) 前掲細井計責任校閲『盛岡藩雜書』第九卷、七七〇頁。

(57) 細井計『南部と奥州道中』二三四頁、吉川弘文館、二〇〇二年五月。

(58) 前掲細井計責任校閲『盛岡藩雜書』第四卷、六五〇頁。

(59) 「北奥路程記」に「黒石野、家所々に十六軒、少し行、坂を上り、下たに北上川を見おろす、爰を俗に座頭コロハシと言う、猶坂を上り、長坂といふ長き坂道なり」(前掲『南部叢書』(七)、一〇四頁)とある。

(付記) 本稿は平成十七年度、十九年度科学研究費補助金(基盤研究(C))による研究成果の一部である。